

アメリカ大陸、満喫ドライブ 目指せ、Fort France

2005 9 03 ~ 9 05

ネブラスカに来て、ここがアメリカ合衆国のど真ん中であることを知りました。アメリカの穀倉地帯にある州ですが、州の東西にロッキーから流れ出た川が流れているにも拘わらず土地はあまり肥沃だとはいえません。ただ、砂が固まったような土地で、木も十分に育たなかったところ。ここでは、山もない、ただ野っ原の州のため、観光をするにしても、その横にとつてもなく長い州を、車で丸一日かけて横切り、やっとコロラドに着くというようなところ。東西に広いアメリカですが、どこに行くにしても高速道路がよく整備されているうえ、なんと言っても、高速道路が只だというのがとても助かります。そんなわけで、ネブラスカの隣の州のワイオミング、コロラドには、山を楽しみにいきましたが、北のほうはすこし縁遠くなっていました。というわけで、アメリカでは数少ない国民の祝日である Labor's Day の日の三連休に、思い切って北の大地のドライブに挑戦してみました。

このドライブは、それほど用意周到に計画を立てたものではなく、ふと、気がついたら、もうアメリカに来て8カ月が経ち、秋ももう直ぐという季節、毎日の日が暮れる時間が少しずつ早くなるのを感じ、ドライブをするなら今のうちと思い立ったものです。それも、自分より後にこちらに来た人が、半年過ぎてもまだドライブで遠出をしたこともなく、楽しみがなかなか見つからないということで、アメリカ大陸のドライブの楽しみ方を、伝授するというほどのものではありませんが、モーターでの宿泊や、道路の状況、地図の読み方などいろいろと経験してもらうつもりで、ドライブでもと誘ったら、是非にということで、即、実行となったわけです。

目指すは、ネブラスカから、五大湖の一つであるスペリオール湖の一番南にある町、Duluth です。ここまでならインターステーツを使えば一日で楽に行けるということで、この町を目指すことになりました。そんなわけで、今回はアメリカ大陸の縦断ドライブです。

一日目 (Sept 3 2005)

Lincoln をでて、I-80 でアイオアの州都である、De Moines (これで、デモアと発音しますから、ここはもうフランス語圏という感じ) を経て I-35 に入り、ミネソタに向かう。州境にある Albert Lea という町で昼食。ここまでで三時間が掛かる。それから I-90 を東に進

み、ウィスコンシン。州境にはだいたいビジターセンターがある。ここでウィスコンシンの観光情報を入手するために一休み。どこのビジターセンターでもそうだが、歳を取ったおばさんが愛想よくお相手をしてくれる。「どこから、来たの?」とか、「これからどこに行くの」というのが定番だが、こちらが東洋人となると、丁寧に観光地についていろいろな情報を親切に教えてくれる。残念なのは、その八割方が理解できないことだ。それでも、まだアメリカに来たばかりだ、という、丁寧な言葉で分かりやすいようにゆっくりとしゃべってくれるからありがたい。ここでは、ステーツ・マップといって、州の公式道路地図をくれる。片言の英語で、「これから、ミシシッピの川沿いをドライブして北に行くのだ。」とたどたどしく喋ったら、この下手な英語を使う日本人に、いい記念になるだろうとバッヂをくれた。これはいいもらい物したと気持ちをよくした。たったこれだけで、なにかウィスコンシンがとても親しみのあるところに思えてくるから不思議。

ラクロスという町。娘の真理奈君が、学生時代の青春をかけて熱をあげたスポーツと同じ名前。どんな由来があるかは知らないが、とにかく、**La Crosse** と書く。フランス語が語源であることは確かだ。このあたり、とにかく広大な湿地帯で、「かわうそ」の毛皮を探し求めたフランス商人が活躍したところであることは確かだ。ものの本によればこのミシシッピ河岸は景色のよいところと紹介されているが、山岳ドライブを楽しんでいた自分にとっては、たまに出てくる崖も今ひとつ迫力不足という感じ。それでも、やはり、豊富な緑と湖のようにひろいミシシッピ川は、ここがかってはアメリカの西の端であり、どこの町も西部開拓の拠点として重要な役割を果たしたところだけに、町の至るところにある古めかしい建物などはその歴史を感じさせる。

運河

このミシシッピ川には、いくつかのダムが築かれており、上流から一つずつ番号が付けられている。水量は豊富ではあっても、落差があまりないので水力発電用のダムではなく、多分、水害対策として作られたのだと思う。そのダムのうち、第四番目のダムが観光地として紹介されていた。道路の脇にパーキングがあり、ここからダムを見物できるようになっている。昔から、ミシシッピの川には蒸気船などの運搬船が多く往来していたと聞いている。そのための運河がここにある。運河といえばパナマ運河やエジプトのスエズ運河のことが頭に浮かぶ。パナマ運河のように、太平洋と大西洋の水位が違えば、ただ通路を作ればよいというわけではなく、運河のところどころに堰を設けて、



ミシシッピ川の運河

ここで水位を調節しながら船を移動させているのである。そこまでは知っていたのだが、実際にどのようにして水位を調整しているのかはこれまで見たことがなかった。ここで、たまたま立ち寄った時に、運良くこのダムで川上の船が堰を通過する現場を見ることができた。いくつかあるダムでここにだけ見学する展望台があった。たかがダムだとおもっていたら、なんと先客が多勢集まって、なにやら見物をしている。聞けば、今、水門が閉まり、川上の船がダムを越えるところだという。水位の調整が凄く早いから、見ていろという。そこで、興味半分、カメラを構えていると、これになるほどと思うほどうまくできている。実際を見てしまえば何のことはないのだが、それはこんな具合だ。まず、下の水門を閉めて水位を上げておく。そして、下る船を運河の中に入れる。全部の船が入ったら、川上の水門を閉め、そして、下の水門を開ける。するとたちまち 2 メートルくらい水位が下がる。そして、川下の水位と同じレベルになったところで、船がおもむろにでていくのである。これがほんの数分の出来事である。川上に行くときには全く逆に、船が運河に入った所で下の水門を閉め、川上の水門を開ければ、たちまちのうちに水位が上がり、悠々と船は川上に出て行くことができるのである。これまで、水位を上げるのにポンプで水を汲みあげるとばかり思っていたが、なんのことはない。水門の開ける順序でどちらにも水位を調整できるのである。これには一本とられた感じ。こんな光景を経験することができ、これが日常茶飯事に行われているアメリカの国の合理性に、これまた感心した次第である。

ミシシッピーの川沿いは景色がよいということであったが、この頃からどうも雲行きが怪しくなり始めた。先は長いので、すこしばかり近道をしてできるだけ今日の宿を早く見つけようということになった。

あまり田舎に行くと、モーターも見つけにくいだろうということで、ウィスコンシンからとりあえず、ミネソタのセントポールという町に入った。ここは州都であるミネアポリスと双子の町といわれるところで、ネブラスカのリンカーンに比べると比較にならないほど大きな街である。ところが、雨がひどくてモーターを探すところではない。仕方なく、さらに車を進め、インターステーツの logging の看板を頼りに宿を見つけることにした。そして、漸く雨が小降りになり、少し北に行った **Forest Lake** というところで宿を見つけたことができた。暗くなり、見知らぬ土地で、しかも雨。なかなかモーターが見つからず、いささか心細かったが、なんとか無事、泊まる場所が決まる。その途端、ほっとして疲れがでる。部屋で一日の反省と明日の計画を話しながらくつろいでいたら、突然大きな犬が椅子の横の居るではないか。喫煙室しか空いていなかったもので、仕方なく、そこに決め、タバコの匂いを消すためのドアを開けて、空気の入替えをしていたからだ。飼い主が慌てて、連れ戻しにきた。この宿、ペットも **OK** と言うことらしい。アメリカ人は旅行にもペットを連れていく。ペットを飼うには、それくらいの思いやりが必要ということか。遠くで雷の音が鳴り響くなか、例によってほろ酔い気分でベッドに横になった。

2日目 (Sept. 4 2005)

朝は雷の稲妻で目が覚める。天気予報によれば、これがまた実はこちらではきめ細かく情報を流してくれ、そして、また良くあたるが、どうも、西の方から雷前線が掛かっているらしい。北に行けば天気は回復するというので、さっさと出発することにした。天気が西から変わってくるのは、日本もアメリカも変わらないと思うが、ただ、違うのは、アメリカ大陸では、偏西風が北から南に吹いているところがある。こういう所は天気が北から南にと移動する。大陸が大きいし地形の変化があまりないので、天気の変り具合が比較的安定している。このため天気予報が良くあたると推測しているが、それにしても、実際、いま自分のいるところが晴れていても、360度見渡し見ると、遙か地平線のかなたで雷がなって、ピカッと光っている。こんな情景を見ると、やはりここの広さは想像を絶している。

北に行けば天気が良くなると期待して、35号線を飛ばす。ハイウェイが奇数であるのは、言わずと知れた、このハイウェイが北と南を結んでいるということ。こうして、自分がどこを走っているのか、どちらに進んで行けば良いのかは、ハイウェイの標識をみれば容易に確認することができる。

Fur Company は閉まっていた。

このあたり、余り高い山はないが、周りは湿原がちらほら見えており、その周りには樹木が緑豊かに茂っている。草原だけのネブラスカとは随分様相が異なる。そうした湿原に住む動物の毛皮が目当てで、古くはフランス人がカナダから下ってこの辺りまで出てきて活躍していたらしい。その名残が **Fur company** の **Trading center**。毛皮の取引所が残っており、ここが、この地方の観光名所となっている。アメリカの独立する前の状況を知る非常に貴重どころのようなものである。ネブラスカの北西部にも、同じような名所がある。この辺りから、南北のダコタ、ネブラスカと、ヨーロッパの毛皮商人が大活躍をしていたことは、ルイスとクラークの冒険のなかでしばしば出てくる話なので、なにか親しみを感じず。そんなわけで、ここにあるセンターを見学するつもりでいたが、とにかく、時間が早く、まだ、開いていなかった。配慮がたりなかったのは、この日が日曜日だったことである。日本人なら、日曜といえば行楽は当たり前であるが、こちらでは、すこし様子が違う。日曜に朝早くから行楽に出かけるのは、ある種の例外のようなもの。キリスト教では、この日は勿論、礼拝の日であるから、遊びに行く前に、まず、教会に行って、牧師さんの説教を聴き、先週の懺悔をして来ることのほうが重要だし、それが先だ、というわけ。それをせずに、朝から競うように遊びに夢中になっているのは、異教徒であるとは言え、少し信心が足りない人種ということになる。だから、そうした人のために、朝早くから観光地を開くこともないというわけ。これは、前々から心得ていたことではあるが、実際、その場に出くわすと、「うっかり」ということに間違いはない。加えて、この日は日曜日。しかも次の日は「**Labor's Day**」の国民の休日。アメリカでは数少ない、家族揃ってゆっくり休みなさいという日なのである。そんなわけで、堅く閉められた入り口の扉で U-ターン。もう

一度、ハイウェイに逆戻り。

やがて、Duluth の町の近くに着く。町の入り口にビジターセンターがあり、ここから Duluth の町と、橋を境に対岸のスペリオルの町が見える。そこはもうウィスコンシンである。ちょうどそのころ、強烈なもやが発生し、車で運転していても怖いくらいすぐ先しか見えない状態だった。が、ここに着いてしばらくしていたら、さっとそれが取り除かれる。そのとき気づいたのは、今まで湿原のなかを走ってきたが、そこが小高い丘の上になっていたこと。眼下のスペリオル湖までは 200 メートルくらいあるかと思われる。その坂を下って下に降りると、もう、もやは見えない。はるか丘の上のほうに筋を書いたように雲が掛かっているだけだ。海から陸に向かう風が、海の上の温かい空気を運び、それが一揆に冷えるので、そこにだけでもやが発生していると、カッテに想像して納得する。それにしても、湖岸はまったく良く晴れているのだから、自然の力は不思議なものである。

日曜日の朝は、ミュージアムは開くのが遅い。やっぱり。

折角であるので、ここで橋をわたり、ウィスコンシンにはいる。そこにはミュージアムといわれるものが一塊になっているので、地図を見ながら尋ねたが、ここでもアメリカはこうなんだと認識を改めた。とにかく道案内のガイド板が小さいこと。地図には出ているので大きな看板があると思うと、これが大間違い。あるとしても高々、車のナンバープレートが二枚か三枚つなげた程度のものしか出ていない。しかも、すぐ直前に一箇所あるくらい。おまけに見つけにくい茶色の看板ときている。うっかり見過ごすことはいつも同じ。あとで、見つけたときには、決まって、何〜んだ、さっき通ったところではないかという調子。そんなミュージアムでも、これが、なかなか大変貴重なものを集めているから驚きも改めてというのが常々。これが、さすがアメリカと驚くもうひとつの現象。そんなこともあり、どうしてもどこか一つのミュージアムに入ろうと懸命に探す。が、なかなか見つからず、運良く見つけたこの町のビジターセンターに飛び込む。聞けば、例によって、何度もその前を通ったという感じのところに目的のミュージアムはあるようだ。今度は慎重に、目を丸くしてその小さな看板を探す。日曜の朝ということで車の数が少ない。できるだけゆっくり走り、右みて、左みて、それらしき看板があれば、とまる寸前まで車を緩めて確認。そして見つけたのが、メテオ・ミュージアム。実は、その名前から、隕石でも展示してあるかと期待した。が、行ってみて、これはまったく天文とは関係の無い海洋博物館。日本の品川にある古い船を固定してつくった船の博物館と同じ。時間も 10 時を過ぎており、これなら大丈夫と期待したのだが、ここでも、「今日の開館は、11 時から」と、すげなくあしらわれた。折角ここまできたのだからと、せめて土産でも買いたいと思ったら、それなら、どうぞというわけで、しばらく店のものを眺めていたら、なんとここに竹でつくったみやげ物が並んでいるではないか。アリゾナで尺八が割れたばかりで、アメリカでは竹は禁物も思っていたのに、思わぬ発見である。そのおみやげ物は、こちらではよくある、例の筒を何本かつるして、風でこれをたたいてメロディーを奏でるもの。これまで、

金属や、ガラス、石でできたものは何度か見たが、なにしろ、竹でこれを作っているのは初めて。どんな音がでるのかと興味が湧き、少し叩いてみたが、これは、あまりいい音色ではなかった。竹の密度では高い音がでず、聴いていて心が弾むというわけには行かないようだ。日曜に教会に行かない者は、ご利益がありませんとのことで、みやげ物を買う間、仕切りのない展示場の中にはいり、かつてスペリオル湖で活躍したであろう蒸気船の古き雄姿を思いおこさせるさまざまな機関部品を見ることができた。湖といってもここはほとんど海と言っていいほどの大きさだから、船そのものもとても大きく、迫力十分だ。

灯台にもう一度入り直し。

目的のミュージアムで楽しむことはできなかったが、これから、いよいよカナダを目指してスペリオル湖の湖岸をひたすら、北に向かうことになる。あとで地図をよく見れば、かなりの緯度であったので、この時にはカナダはもうすぐのところまで来ていたようだ。しばらく、湖岸ドライブということになったが、このあたり夏は行楽客で大変な賑わいとなるようだ。とにかく行楽地といってもこちらは日本のごぼうを洗うような込み具合にはならない。まるで、御殿のような家が延々とどこまでも続いている。道路側には広々とした庭に、みずみずしい緑の芝生と色とりどりの花を咲かせたフラワーガーデン。そこを抜けると、ポーチのついたベランダがぐるりと取り囲む大きな館。そして、裏庭から湖までのわずかの道をたどれば、もう、白いレジャーボートの待つアリーナである。勿論、自家用のもの。これで、湖に出て、思い切り水上スキー、釣り、トローリングとこの短い夏を満喫するのであろう。小生が勤める TRI-CON も水上バイクのシートを作っているが、上級の車一台もする位の娯楽用。よく金があるなと思うが、こちらの人はこういうレジャーを贅沢と思わないのか、それに惜しみなく金を使う。

その海岸べりがすこし岩に囲まれたようなところに、灯台がある。ここも観光の名所となっていて、中には立派なみやげ物やがある。こちらでは観光の名所といっても、そこで金を巻き上げるような態度でみやげ物を売ることはない。また、どこも似たようなものしか売っていないので、なかなか、これはというものが見付からないのが頭痛の種である。1916年に建てられたというこの灯台。それ以来、昼も夜と明かりをともし続けているらしい。とにかく、ここに来る途中でみたが、局地的な霧(もや)が凄いので、こうした灯台も、たとえ湖とはいえ、なくてはならないものだったのだろう。ここから、湖が狭くなり Duluth の港に行くが、湖と言ってもここは対岸までが 30 マイルもあるといていた。とにかく自然がどでかいということ。久しぶりに灯台にはいり、アメリカで「東大」にもう一度入りましたと冗談を飛ばし、これまで、陸だけしか見てこなかったアメリカの別の自然の大きさを多いに楽しんだ次第である。

フィンランド、スーダンと言う町の名前

スペリオル湖を離れ、ミネソタの 1 号線を走る。アメリカで一番北にある一号線だ。が、

奇数番号なので、どこの州にも北から南に走る高速は一号から始まることになる。なにもここに限ってということはないが、それでも、ここがカナダに近いということで、価値ある一号線に間違いはない。その道を走っていると、途中の町の名前にびっくり。ついでに名前がフィンランドというわけだ。それだけなら珍しいということでお



なぜか、突然、スーダン

わるが、しばらくすると、今度はスーダンと言う町が現れる。そして、

最後にはアンゴラという地名まで出てきた。田舎であるので、大きな町ではないが、なぜこうした町ができたのかは興味のあるところ。推察するに、この辺りはもともとフランスの毛皮商人が活躍したところ。当然のことながら、彼らは下働きの奴隷も一緒につれてきたに違いない。フィンランドはフランスと争って毛皮を取りに来たのかもしれないが、スーダンやアンゴラとなるとフランスの植民地。そうしたところからかってたくさんの奴隷が連れて来られたのではというのは想像に難くない。とりわけ、スーダンと言う町は、毛皮と同時に、鉱山があってかなりの賑わいを見せていたらしい。鉱夫として多くのアフリカの人がここで活躍し、その名残でこんな町が出来たのかも知れない。それにしても、この北の大地でアフリカの人はどんな冬の越し方をしたのだろうか。なにしろ、マイナス30℃にもなるところだ。

この炭鉱、歓迎の看板には、北米で一番の古く、豊かで、深い鉱山と出ていた。そして、1962年には、閉山となったようで、それ以後は寂れた町になったらしい。立派な看板を記念に撮影することにした。

Fort France、ここはカナダ。

すぐに着くかと思っても、なかなか目的地まで行き届かず、何時間も針葉樹の森の同じ景色を見なくてもならないというのがこの常識。それでも、100マイル、200マイルを走れば目的地に着く。そんな思いをしながら、いよいよ、International Fallの町からカナダに入ることになる。カナダではどの程度のガソリン代になるか分からないし、また、支払も不安があるので、ここでガソリンを入れる。そして、店のおばさんに、「カナダまで、どのくらいか」ときけば、ほんの数ブロックだという。いよいよカナダである。ところが、言われたとおりに道を真っ直ぐに進んでいってもそれらしきところが見当たらない。国境であるから、いかめしい建物があり、厳しい検査がされるとばかり思っていた。

が、やっと見つけたカナダへの道は、なんとわずかの二三十メートル程度の橋の脇に料金所があるだけ。と言うのも、カナダに行く橋が有料となっており、車一台あたり 6 ドルずつ徴収しようというものだ。ここで金を払うと何のことはないアメリカ出国になる。橋を渡りながら、国境はどこにあるの、なにか大きなゲートはないのかなどと怪訝そうに同僚が言う。ところが、カナダに入るときにひと悶着。入国のためのイミグレーションは、外国人の場合には、簡単な面接がある。夕方の四時といっても、こちらは、8 時くらいまで明るいので、もうすぐ日が暮れるという感じではないが、それでもこの日のうちにミネソタのいけるところまで南下をしなくてはならない。最初は一時間くらいカナダをドライブできるだろうと目論んでいたが、これがとんだ大間違い。自分達の前で、イミグレーションの審査を受けていた叔父さん、どこか、胡散臭いような感じはしたが。この人、アメリカでは身分証明書となるアイデンティフィケーションを何も持っていないということで悶着を起こしている。女性の審査官は、これでは、カナダに入国できないとすげなく拒否しているが、この人これくらいでは引き下がらない。何とか入れろと、日本流で言えば、多分、「ロレツ」の回らないような口調で話しているのだろう。とにかく、もう一度アメリカに帰れといっているらしい。そこは、この叔父さん、あきらめて一度アメリカに戻ったらしいが、すぐに電話をかけてきて、これからもうひと悶着。この係官、われわれの審査を始めたのだが、電話が掛かってきたから、ちょっと待っていると、奥に入ってしまった。そして、電話で話しているうちに大分興奮してきているようで、机の中から書類を出し、先ほどの審査書類を振りかざして、なにやらわめいている。そのうち、本を開いて電話の向こうに向かって怒鳴り始めた。規則がこうなっているから、なにが何でも駄目だと言わんばかりの口調である。そんな、悶着があったため、我々の書類を審査するどころではない。結局、20 分以上待たされて、漸く面接となった。ここで、聞かれたのは、

「どこから来たのか？」

「国はどこだ？」

「仕事は？」

「ここに来た目的は？」

「なにでここまで来たのか？」

「今夜の泊まりはどこか？」

などと聞かれた。このつぎのための参考になるかと思い、必死でメモをした次第。「カナダには、すこしだけ、観光に来た。あまり時間がないので、直ぐにまたアメリカに戻るつもりだ、」といったら、あまりにも待たせたそのお詫びにと、カナダの国旗にもあるメープルのシンボルバッジをくれた。それで気を大きくして、ついでに、小さな国旗も記念にとねだる。これも、気前よくプレゼントしてくれ、その後は、「ここに行けば、デューティーフリーの店がある」とまで親切にして教えてくれた。これで何とか、無事、念願のカナダに入ることができた。陸路で国境を越えたのはメキシコに行ったとき以来である。ボーイスカウトの隊長をしていたときに団委員長の大塚さんが、子供たちに陸続きの国境がどんな

ものか是非経験させてやりたいと、少ない時間をかけて、ロスアンゼルスからサンディエゴに行き、ティワナまで、行った時のことを思い出した。あのときも、子供たちが土産に「飛び出しナイフ」を買ったりして、大騒ぎになったことがあるが、島国の日本人にとっては、自分の国の特異性を実感できるチャンスでもあり、とても貴重な体験であると思う。

暫く、といっても高々30分程度であるが、カナダの町「Fort France」と言うから、フランス人が開発した町であろう、ここをドライブ。すこし走って、道路の脇のスピード標識を見ると、これが制限速度 60 キロとなっている。確かにここは、カナダという実感が湧いてくる。アメリカに来て、マイル表示のスピード制限の標識にはなかなかなじめず、漸く、このごろでは、60 マイルも出せば、時速が 100 キロ近くもあり、相当なスピードであると認識できるようになったばかり。カナダでは、なんとなく日本にいるような気にもなり嬉しくもなったキロ表示のスピード制限板であった。そして、教わったみやげ物屋に急いで入る。ここが観光町であるかどうかは分からないが、数少ない国境を越える町であることは間違いない。そんな町にはたくさんのみやげ物屋があるかとおもったが、どうも、まわりにはここ一軒しかない。このあたりの人は、国境を越えるのは日常茶飯事。なにも、国境を越えるたびにわざわざみやげ物屋に入ることもないのだろう。このお店もそれほど繁盛しているようには見えなかった。観光客相手のみやげ物屋ではなさそうなので、並べてある品物もありきたりのもの。それでも、何か、記念になるものはと必死で探す。金目のものは手がでないので、そこそこ手ごろなガラス細工を買い、支払いをクレジットですることにした。アメリカのクレジットが使えるというので、これも経験の一つ、試すことにした。このお店の買いものは、なぜか、直ぐそこで手渡しにせず、通り一つ越したところで、このお店の売り子が、渡すことになっているらしい。どうも時間を稼ぐためかもしれないが、なぜ、そんな仕組みになっているかはいまだに理解できない。たいした買い物ではなかったが、それでも、お店の姉さんがニコニコしながら、持ってきてくれた。土産を手渡してもらった後、記念写真を撮りたいといったら、愛想良く応じてくれた。肩を組み、ご機嫌の写真を一枚パチリ。

針葉樹の森を只、ひたすら走る

思いがけず時間が掛かってしまったので、後は、ただひたすら、今日のねぐらを求めて南下をするだけとなった。再び、アメリカに戻り、今度は、南西に向かって白樺林のなか、71 号線をひた走る。ここは、スペリオール湖から 100 マイルくらい離れているはずだが、回りは依然として、「スペリオール森林」の看板が出ている。東京から清水・静岡あたりまで、一つの森が広がっているということ。この広さがお分かりいただけるだろうか。とにかく、高速道路は林の中を只、只、真っ直ぐ走っているだけ。両脇は延々と続く森林だ。と、突然、自動車の前にアライグマが出現。ゆっくり、ゆっくり、道路を横切っている。その動作があまりにも緩慢なのは、ここには、彼らの天敵がいないということか。かなり前の方で気がついたから良いようなもの。何とか跳ねずにすんだが、これが自動車の直前とか、

夜ともなるとよけきれずに、という結末になるのであろう。とにかく、こちらでドライブしていると、その犠牲者の多いこと、多いこと。

この日は、デトロイト・レイクスと言う町まで行く予定であったが、結局、かなり長いドライブをしたことと、朝も早かったので、とちゅうの **Bemidji** という町に泊まることになった。この **Bemidji** という町が、また、懐かしい子供の頃を思い出させてくれる楽しい町であったのだが、それは行ってみて初めて気がついたこと。

いつもは、ハンドルに握りながら、パンをかじったり、地図をみてコースを確認したりするのだが、今回のドライブは、名ドライバーがついているのでもっぱらナビゲーター役。少々老眼で細かい字は読めないが、それでも、インターステーツ沿いの町とか、ちょっとした人口の町であれば、地図の中に濃い字で表示されているので良く分かる。カナダからの帰り、すこし時間が遅くなり、知らない土地という心細さもあったので、予定より早くこの日の宿を決めた。地図にすこし大きな字で **Bemidji** と書かれた街があった。ここに、昨日のモーターのチェーン店があるというので、もらったパンフレットを頼りにネオンをさがす。ところが、すこし暗くなると自分が走っている方角が定かでなくなり、なかなか見つからない。大きな街になると高速道路は郊外ということになり、町なかのメインストリートから離れている。モーターはだいたい街道筋にあるので直ぐに見つかるはずだ。そんなところの油断もあり、後から気がつけばなんのことはない、そのモーターの一つ前の交差点で引き返していたり、反対側の家並みを必死に探していたりという状態。そんなこと



こーんなに、おおきいんだ。

裏にあった。この話はてっきりカナダの話しだとばかりおもっていたが、ここミネソタの田舎町の伝説であったと聞いて、びっくりするやら、嬉しくなるやら。

三日目 (Sept 5 2005)

早速、この日の朝、すこし早く起きて、街角にある公園に建っているというバンニャン

ともあり、何度も地図を眺めているうちに、この町が、「ポール・バンニャン」の町と書いてあることを発見。懐かしい、小学校の国語の本に出ていた名前である。1800年代にここらあたり、Chippewa Valley という森林地帯で活躍した木こりの伝説である。すでに半世紀も前のことであり、なんとなく、大男の話くらいにしか覚えていないのだが、その名前だけはその当時、小学生が始めて聞いた外国人の名前だったのではっきりと脳

の像を見に行く。よくよく地図で確かめ、ホテルを出る時に道順も聞いてきたので、これは直ぐに見つけることができた。見て、並んで立って、写真を取り、その大きさにもう一度びっくり。何しろ、一緒につれていたという大牛の背丈、両手を上に伸ばしてやっとハナに届くというほど。ミネソタの北部にある多くの湖は、この牛の足跡でできたとか。バンニャンはそれ以上におおきかったという。その像の大きさは数メートルもあったのではなかろうか。

Montevideo という町 Monte とは

これで、気を良くして、Park Rapid から Detroit Lake へ。このあたり、見事な針葉樹林と小さな湖が限りなく続いている。そして Fergus Falls へ。大分、南に来たことになる。道路の両脇は見事なトウモロコシ畑と大豆の畑だ。そろそろ夏の終わりということで、緑溢れた平原にすこし黄色の紋様が出始めている。それにしてもどこまでも続くトウモロコシ畑。これをどうやって収穫するのだろうか、他人事ながら心配する。聞くところでは、収穫の時期には、農家は家族全員が集合し、徹夜をして一晩のうちに何エーカーも刈り取ってしまうのだそうだ。その時には、町の大学にいつている息子も、外に嫁いだ娘も総動員という話を聞いた。そうでもしなければ、高い金で借りたトラクターや、コンバインの負担が払えないということだろう。広い農場のなかにポツンポツンと林があり、そこに農家があるのだが、とにかく、隣の家までは何マイルも離れているなんていうのは当たり前。ここでは、近所づきあいなんていうわずらわしいものはないのだろう。その代わり、なにからなにまで自分たちで処理をしなくてはならない。自給自足が当たり前なのはこの広い大地がそれを求めているのだろう。

Morris という町を過ぎた頃から、雨は降っていないのに、遠くで稲妻が光っている。これをなんとかカメラに納めようと挑戦するが、さすがに光は一瞬のうち。落雷があるときには相当長く光っているようだが、そのたびにシャッターを切るが、写っているのは真っ黒な雲だけ。そんな写真が何枚も撮れた。正解だったのは8mmビデオ。これなら、何十秒とカメラを回しきりにしておけばよいので、方角さえ合えば、ばっちりというわけ。日本の雷銀座と言われる赤城でよく見たが、落雷が自分の近く出なければ、その一瞬は何度もみて気持ちりがスキッとする。

そこから、さらに南下すると



風車がゆっくりとまわっていた。

今度は Montevideo という町につく。とにかく、名前がユニークだ。コロラドにいったときにも、Montezuma、とか、Montrosa などというハイカラな名前のついた町があった。接頭語のように、Monte がついているが、これがなかなか辞書にでていない。町の由来が分かればなにかのヒントがつかめるかもしれない。どうもこの Monte というのは、山の意味の Mont. から来ているのではと思う。モンブランのようにフランス語からきているのではと勝手に想像している。ここにもフランスの影が見えるようだ。このからしばらく走ると、急に丘の上にこれまたたくさんの風車が出現してきた。ということはこの風はかなり一定の方向から吹いているということか。風車はみんな北風を受けているようだ。アメリカの偏西風は内陸では、カナダからの北風となり、その冷たさは人一倍。ゆっくりとまわる風車を見ながら、他人の車の後についてややスピード上げて走っていた。この時、ハンドルは私が握っていた。町外れ、道路は真っ直ぐ、なだらかな丘を越え、かなり気分がよい。前には三台ほど走っている。直ぐ前はトラックだ。とその時、中央分離帯に止まっていた車がにわかに動き出した。覆面パトカーだ。なんとなく、このあたりスピード違反で捕まったらまずいななどと思いながら走っていた時なので、一瞬、しまったと思った。一番後ろを走っていたので、大丈夫と思っていたが、これは、やられたかと、あとは、どう対応しようかと、頭のなかがポーッした状態で、おそろおそろバックミラーをみながら、速度を落とす。と、前を走っていたトラックが路肩に車を寄せ止まった。彼も自分がやられたと思って観念したのだろう。この車をやり過ぎし、見ているとパトカーはこのトラックは見逃している。やっぱり自分か、もはやこれまでと、仕方なくこちらを路肩に寄せ、停車する。ところが、パトカーは、何のことはない、自分の車を通り越していく。ふっつと、大きな安堵の息をはく。助かった。なら、どの自動車もスピード違反なのか。前にあと二台いる。その二台も無事なのかと興味津々。暫くして、やっぱり一番前を走っていた車が捕まっていた。その車、スピード制限を 10 マイルも越えてはいなかったのだが、それでもやられた。これは、パトカーの虫の居所がよほど悪かったのだろうと同情。そんなこともあり、あまりスピードは出せないし、制限速度ぎりぎりまで暫く走ることにした。前の車も同じ心境か、やっぱり、ゆっくりと走っている。景色でも楽しみながら、暫くはこのスピードでノンビリ走ろうと決め込んだ。と、やはり、それがゆっくり過ぎたのか、この二台の車を追い抜いていくオートバイがいた。彼は、それまで我々の後ろで大人しく無く走っていたのだが、こちらが何時までもゆっくりはしているものだから、しびれをきらしたのだろう。二台、一気に追い抜く。「兄さん、そんなに急いで、捕まるよ」と冗談混じりに見送る。ところが、やっぱりである。調子に乗って飛ばしたのが悪かった。こともあろうに我々の直ぐ前にもう一台のパトカーがいたのだ。たちまち、このオートバイ、スピード違反で捕まってしまった。まさに気の毒としか言いようがない。

凄い風車の集団、

あとで調べたところでは、このあたりの風車はかなり有名なようである。因みにこの風車、

三枚羽のもので、高さが 316 フィート、羽の長さが 105 フィートで、羽一枚の重さはなんと 3.1 t もあるとのこと。風向きを調整するセンサーがついていて、できるだけ効率よく発電ができるようになっている。これで、年間の発電量は、3,000,000Kwh とのこと。このあたりの民家の 300 軒の需要が賄えるらしい。北風をうけて力強く回る風車が延々と続いているのである。カリフォルニアやカンザスでもものすごい数の風車の集団をみたが、アメリカではこうしたエネルギー源の多様化が着々と、しかもちゃっかりと進んでいる。風車は農場や牧場にも数多く建てられている。日本のように、こうしたものを立てるとなるとなにかやかと問題が多く、風車があるのは人家からほど遠い岬の先とか、河川敷とかであるが、こちらはとにかく、場所には不自由しない。土地の有効利用なのか、あるいは、牧場主の多角経営なのかはわからないが・・・。

やがて、この日のテーマでもあった、Pipestone の町につく。町の名前が示すとおり、ここには、インディアンの文化の残っている町としてかなり手厚く保護されている。というのも、インディアンが友好の象徴として使用していたパイプの多くがここで産出される石から作られていたからだ。こうした文化を紹介した、アメリカで数少ないナショナルミュージアムがここにある。Pipestone とは、日本のキセルを一回りも、ふた周りも大きくしたもので、先端の金の部分を石で作っているわけである。そのための石は、中をくりぬいたり、あるいは、緻密な彫刻が施したりするので、きめの細かな石で、しかも、加工ができるものでなければならない。そのため、独特の地層にある石が使われる。その地層がこの町のすぐ近くにあり、勿論、昔は、ここは秘密の場所とされていたのであろうが、その石切り場から石が切り出されていたのである。石は金鋸やナイフで細工をすることができる。穴を開けるときには、昔の原住民が火を起こす方法とおなじように、木でつくろったドリルのようなもの先に固い石のやじりをつけ、くりぬいていたようだ。そして、長い時間をかけ、模様をつけ、丁寧に磨き上げ、平和の象徴として使われる道具となったようだ。パイプの柄の部分は木を二つに割り、中をくりぬいて煙が通るようにしてから、再び貼り合わせてつくる。だから、あまり小さな細いものはできない。このため、このパイプ、全体で、子どもの背丈ぐらい大きなものになる。これを、酋長は大事に抱きながら、厳かに、儀式に持ち出してくるのである。そして、他の部族との戦争の終結や、白人との友好のセレモニーでは、このパイプを使ってタバコの回しのみをし、「お前、友達。私、インデ



インディアンの酋長の飾り

に、儀式に持ち出してくるのである。そして、他の部族との戦争の終結や、白人との友好のセレモニーでは、このパイプを使ってタバコの回しのみをし、「お前、友達。私、インデ

「イアン、よい人。嘘つかない。」なんて、言っていたのではなかろうか。
このパイプにまつわる伝説がいくつかある。それを紹介しよう。

Arapaho の「国が作られた話」

Arapaho の人たちは、この大地や、人間、そして、草原でくらす動物たちが創造される前に神聖な、自分たち部族のパイプが存在していたと信じていた。この部族の創造の物語はこうである。大きな水以外に最初はなにも無かった。そして、この水の底に、青銅の祭壇があり、その上に、聖霊である Nih'ancan とパイプが乗せられていた。この” 聖霊 “ が、鳥たちになんとか助けてくれるように頼んだ。そこで、鳥たちは亀と協力して水の下から膨大な量の泥をすくい出した。Nih'ancan は、それをパイプの上で乾かし、周りにばらまいた。これを限りなく繰り返しているうちに、そこは乾いた大地となったのである。土をばら撒けなかったところは、川や湖になったのである。こうして大地ができるのと Nih'ancan は、今度は、その土から男と女を創造した。

Dakota 族の「Buffalo の少女」の物語

Dakota (Sioux) 族には、神霊から贈られた神聖なパイプがあるという言い伝えがある。この物語には、2 人の猟師が登場する。彼らはある日、ずっーと彼方から自分たちの方に向かってくるなにか白く耀くものを見た。最初はそれが、白いバッファローの子牛ではないかとおもった。が、近づいて来るにつれて、それは、白い牛の毛皮のドレスを着た綺麗な若い少女に変わっているのに気付いた。そして、その少女は、見事に飾られたパイプを携えていた。

一人の男はその少女を手籠めにしようと考えた。彼の思いがあまりにも強すぎたので、彼の肉体はなえて、骨は草原に山積みとなった。

もう一人の男は、彼の気持ちは畏敬の念と、その少女を尊敬する気持ちで一杯であった。そして、彼は、パイプを与えられ、その使い方を教わった。この少女はやがて振り向いて帰ってしまい、ついに、白いバッファローの子牛となって、水平線の彼方に消えていった。

若い男は仲間のいる自分たちの村に帰り、その神聖なパイプを持っているということで周りから尊敬される日々を送った。しっかりと大事に保管され、最初のパイプといわれたこのパイプは、今も Dakota の一つの部族によって保護されているような。

Blackfoot 族の「Medicine Pipe」(魔法のパイプ) の物語

Blackfoot 族は、とりわけ神聖なパイプをたくさん持っていた。が、それらは、それぞれ想像のなかで受け入れられた言い伝えのなかで作られたものである。最もよく知られているのは、魔法のパイプの話である。この原典は、雷と稲妻の代表である神聖なるもの” Thunder” から Blackfoot に与えられたものであるという話である。Blackfoot 族の間で常

識となっている、ものを買うときの風習から、このパイプのコピー(もしくは、すこしは違うところがあるかもしれないが)が、少なくとも一ダースは作られたものと思われる。そして、そのそれぞれがいろいろな目的のために使われた。これらのパイプの保持者は非常に敬われ、かつ、多くのタブーと、それを保管し、使うときの複雑な規則をしっかりと受け継いでいかなければならなかった。これらのパイプを用いたさまざまな儀式のうちで最も重要とされたのは、春一番に雷の音を聞いたときにこのパイプを保管箱から出すときであった。この儀式は、その年に自分たちの村で稲妻によって誰も犠牲者がでないことを祈る祈祷司によって執り行われた。

このミュージアムで記念に、インディアンの吹く笛が録音された CD を買う。寂しげなその音色はどこか尺八の音色と似ていたからだ。皇帝貴族のための完成された西洋音楽と違い、尺八といい、インカのケーナといい、こうした土着の音楽はどここの国のものも何か似たものを感じるのはなぜなのだろうか。家に帰りこの CD を聞くたびにそんなことを思っている。

Pipestone から、サウス・ダコタにはいり、29号線を走るわれわれの車と前後して、サウス・ダコタの州のレスキュー隊が何台も連ねてボートを牽引している。このときはまさかと思った。とにかく、台風がミシシッピーに来て、ニューオーリンズが水浸しになり、大勢の死者が出るほど。町が復興するのに何年かかるか分からないという。その災害地に、ここから行くわけが無いと思っていた。1,200 マイルはある。車で三日はかかるのだ。ところが、この旅行記を書いているころ、ネブラスカからも救援隊が向かうことになった。このとき初めて、あの、サウス・ダコタで見たレスキュー隊はやはりミシシッピーまで出かけたのだ、と気付いた。ほとんどの自動車は運転手ひとり。それが、アメリカ大陸を縦断して被災地に、一刻も早く助けを求めている人のところに行こうと言うわけである。そのスケールの大きさと、距離をものともせず、同じ国の仲間を助けに行こうというアメリカ人の心意気を感じた。やはりここは日本とどこか違う。

こうして、三日間で走りまくった走行距離は、1,780 マイル。一日平均 593 マイルでした。そのほとんどを同僚の田中氏がハンドルを握ってくれました。おかげで、こちらは大助かり。本当にご苦労様でした。

因みに、1,780 マイルは、2,850 キロです。東京から神戸が 600 キロと言われますから、
..... それにしてもよく走りました。

使用したガソリン 76 gallon

この時期、丁度、ミシシッピーが台風「カテリナ」に襲われ、製油所に被害がで

たと言うことで、ガソリンが急騰していました。Gallon あたり、2.8~3.2 ドルしていました。

(Sept. 18 2005 記)